

『南の虹のルーシー』から移民博物館へ

—— 2世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷 ——

藤川隆男

今回の報告の目的は、主に南オーストラリア植民地の例を取り上げて、オーストラリアの移民の歴史を概観すると同時に、そのいくつかの特徴を描写することである。

オーストラリアへの移民（入移民）の構造は、次のように変遷してきた。1788年の入植開始から1830年代中頃までは、囚人移民、つまり強制労働を行う移民が中心であったが、イギリス帝国における奴隷制が廃止されるのとほぼ同時に、これが渡航費を援助された補助移民を中心とする制度に取って代わられた。1890年までは急激な経済発展の時代で、新たな移民の流入が経済成長を支えた。前世紀転換期の経済危機の時代を経て、20世紀にはアジアからの移民を禁止する白豪主義を標榜し、帝国との結びつきを強めようとする移民政策の時代に入る。この時期、移民の流入は停滞し、経済成長も緩慢となった。これに転機をもたらしたのが第2次世界大戦である。戦後の高度成長を支える労働力として、多数の非英語圏のヨーロッパ系移民が流入した。1970年代になると白豪主義も廃止され、オーストラリアは多様な移民文化を尊重する多文化主義の国に生まれ変わった。白豪主義の廃止後ほどなく、移民補助制度も廃止された。戦後、入移民の実数はかつてなかったほどの規模に達したが、他方で、19世紀に較べると、人口増加率に占める移民の貢献度は逆に低下する。1997年頃から移民の質に関する転換が起こる。それまでは非熟練労働者、難民、家族移民などが移民の主流であったが、技術移民や資本を持った移民が入移民の過半数を占めるようになり、現在に至っている。

こうした変遷の中で、最初の大きな変化は、1830年代の囚人移民から補助移民への変化である。アニメ『南の虹のルーシー』はちょうどこの時期を扱った作品であり、新しい移民制度の社会的な側面を詳しく扱っており興味深い（詳しくは『アニメで読む世界史2』山川出版社、2015年、114-132頁）。移民補助の仕組みは、当時イギリスで勢いを得ていた植民地改革運動の理論家であったエドワード・ギボン・ウェイクフィールドの組織的植民論に基づいていた。植民地の土地を一定の価格で本国の資本家に売却し（1エーカー20シリングくらい）、その土地の売却益で移民する労働者の渡航費を払う。さらに土地を買った資本家も移民して、補助移民として来た労働者を雇い農業を事業として行うというのが制度の基本であった。アニメの舞台になった南オーストラリア植民地だけでなく、オーストラリア全体にこの制度は拡大され、1980年代に廃止されるまでの間、純移民増の約半分を供給した。『南の虹のルーシー』の主人公のポップルー家は、補助移民の人びとの生活を描いており、ペティウェルさんは資本家を代表する人物である。

イギリスは、資本家に土地を売り、それを移民補助に使ったわけだが、売られた土地には先住民のアボリジナルの諸民族が住んでおり、そうした人びととの関係が問題となった。当時のイギリスは人道主義がもっとも盛んであった時代であり、1836年の南オーストラリアの植民会社への特許状には、先住民の土地占有権を認める条項が含まれていた。たとえば土地売却益の

20%を先住民のものとしており、法の下での平等な権利も保障されていた。ポップル一家が住みつけたアデレードでは、先住民村や先住民学校が作られ、先住民保護官も任命された。しかし、先住民の土地権原を認める条項は反故にされてしまう。牧羊業の拡大に伴って、先住民は居住地から追い立てられ、毛布や食料の供給だけを受けて、居留地やキャンプなどの社会的周縁部に追いやられていった。先住民の土地権原が、法的に再発見されたのは1992年のマボウ判決であった。

19世紀オーストラリアの経済発展は、新しい移民の流入とそれを支え、それによって支えられる産業の勃興に依存していた。牧羊業と鉱山産業はその発展を進める両輪であった。牧羊業は、組織的植民論の予想に反して、売却が行われていない土地を勝手に占有した牧羊業者によって拡大し、オーストラリア産の羊毛は、19世紀半ばにはイギリスの羊毛輸入の半分近くを占めるようになった。鉱山業に関しては、1850年代のゴールドラッシュはあまりにも有名であるが、最初の本格的な鉱山は、南オーストラリアで開発された露天掘りのバラ銅鉱山である。その品位は20%以上で、驚異の銅含有率を誇っていた。

現在のバラの町は、歴史の町として、町全体で歴史的環境の保存に取り組んでいる。バラだけではなく、現在オーストラリアには、人口比で考えるときわめて多数の歴史博物館があり、歴史は社会認識の主要な要素になっている。とりわけ南オーストラリアは、ヴィクトリアと並んで、総合的な移民博物館を持つ州であり、その展示内容を通じて、20世紀の移民史あるいは移民の表象内容を検討できる。

移民博物館は、多文化主義の博物館である。移民の歴史を多様な民族的・文化的集団のオーストラリアへの移動の歴史として描いている。ただし、同時に歴史の負の側面をあたかもなかったように扱うこともないし、それを一方的な解釈で美化することもない。先住民に対する入植者の暴力は描かれており、それが「侵略」であったことが明言されている。つまり、「侵略には多様な解釈があって」といようなあいまいな言い逃れはないのである。また、中国人の排斥や白豪主義の不当性も質の高い展示で明示されている。とりわけ白豪主義に関しては、さまざまな背景の人がどのような扱いを受けたかをボタンを押すことでわかるようになっている。さらに近年政治問題化している難民の拘留センターも取り上げて、難民に対する不当な扱いを指摘している。全体としては、きわめて質の高い展示であると言える。

しかし、問題がないわけではない。最初に移民の歴史を概観してきたが、1990年代から顕在化してきた移民の質的転換、つまり非熟練労働、難民、家族移民、補助移民から、技能や専門職を持った移民や資本を持った移民への転換に無関心なところは、博物館が近年の新しい変化を十分に取り込めていない証左である。現在、オーストラリアの多文化社会は曲がり角にあり、それは移民の構造にも反映されている。社会が将来向かうべき未来像が見えないのである。こうした状況は反面、過去への関心を高めるという意味では、歴史家にとって好都合なことでもあるのだが、未来のない歴史はあまりに不毛でもある。おそらくこれからの移民史研究は、現実の転換を読み込んだものになる必要があると同時に、ポスト多文化社会への展望の下に語られることが望まれよう。